

申請者領域・氏名	病態制御科学領域 分子病態薬理学教育研究分野 氏名 八重樫 裕幸
指導教授氏名	村上 学
論文審査担当者	主査 早狩 誠 副査 大門 眞、今泉 忠淳
(論文題目) Diets of obese and non-obese older subjects 肥満高齢者と非肥満高齢者のダイエット	
(論文審査の要旨) 本研究では、食物摂取の種類から摂取カロリーを算出するソフトを開発し、そのソフトを用いて高齢者の肥満形成への摂取カロリーおよび運動量の寄与について検討を行った。 方法 対象者は秋田県大館市で行なわれている介護予防プログラムに参加している健康な後期高齢者 133 名とした。なお、心疾患、肺疾患、脳疾患、代謝疾患を有する高齢者は除外した。肥満度は BMI $25 \text{ kg/m}^2$ を指標として判定した。平均年齢は $78 \pm 6$ 歳であった。調査はアンケートにて行い、その内容は摂取食物や運動内容の他に、生活スタイル、趣味、健康評価等も含めた。摂取食物のカロリー算出ソフトは日本肥満学会で推奨されている $6,697 \text{ kJ/日}$ を基準に 11 分類された理想的な量とバランスが表示可能である。本ソフトには介護予防プログラム前の 2 週間内の食事内容を入力し、そのうちの 3 日間のデータから基準値と比較し解析した。 結果 1 肥満群 ( $n=44: 27.1 \pm 2.1 \text{ kg/m}^2$ ) では運動の有無はそれぞれ 77%と 23%、非肥満群 ( $n=84: 21.5 \pm 2.3 \text{ kg/m}^2$ ) では 73%と 27%であったが、運動の有無による肥満度には有為な差を認めなかった。 2 肥満群では、肉、卵、油、砂糖の摂取比が有為に高かった ( $p < 0.01$ )。 3 その他に、趣味の有無では両群に肥満形成に有為な差は認められなかった。 4 食物摂取比、運動、および参加型趣味と肥満との関連性を多重ロジスティック回帰解析した結果、摂取比と肥満が有為であった。 以上から、今回開発したソフトを用いた解析結果から、高齢者における肥満形成には、運動量よりもむしろ食物摂取が第一危険因子である可能性が得られた。これは小児において運動不足が肥満形成の危険因子とする報告を考慮すると、肥満形成の危険因子は世代によって異なることを示した重要な知見であり学位に値する。	
公表雑誌名	Health Vol. 5, 361-3, 2013